不思議なる空間断層

海野十三

友人の友枝八郎は、ちょっと風変りな人物である。どんなに彼が風変りであるか、それを知るには、彼が私によく聞かせる夢の話を御紹介するのが捷径（はやみち）であろう。

かれ友枝は、好んで夢の話をした。彼が見る夢は、たいへん奇妙でもあり、そして随分しっかりした内容をもっていて、あまり夢を見ることのない私などにとっては、美しくもあれば、ときにはまた薄気味わるく感ずることもあるのだ。（乃公（おれ）は夢で、同じ町を幾度となく見る）と、彼は空ろな眼をギロリと動かしていうのであった。（……ああ、いつか来た町へまた出

たよ、とそう感付くのだよ。すると、夢の中だけで知り合いになったいろいろな顔の人物が、あとからあとへと現われてくるのだ。年配の男もあれば、妙齢の女もある。……乃公はその不思議な人物たちと、永い物語の次をまた続けてするように、前後があった話をし合うのだ。しかしどっちかというといつも似たようなことを繰返していて、ああ、この次はこうなるな――と思うと、きっとそのようになってゆくのだ。おかしいほど、乃公の想像が適中するのだよ。それからもう一つ奇妙なことがある。それは乃公のこの顔だ。その夢の中で、乃公は一つの顔を持っているが、その顔と

いうのが、なんと今君が見ている乃公の顔とは全然違った顔なのだ。顔色だってこんなに青白いんではない、赤銅色に赭(あか)いとでもいうか。顔の寸法も、もっと長く、鼻はきりりとひきしまり、口もたいへんに大きくて、そして眼光なんか、実にもう生々としているのだ。その上に、頭髪なんども、毛がふさふさとしていて立派だし、それに勇ましい髭なんか生やしているんだ。——その豪そうな顔の男が夢の中の乃公なのさ。どうだ、随分と不思議な話だろう。だから乃公はどうかすると変なことを考えるんだ。あの夢に見る町や人々がどこかにチャンと実在するのじゃないか。乃公

の魂は一つだけれど、顔の違った二つの肉体を持っているのじゃないか、などとね。ああ君は乃公の夢の話を軽蔑しているね。君の顔色で、そう思っているってことがよく判るよ。じゃあ、乃公はもっと不思議な恐ろしい話を聞かせてあげるよ、すくなくとも君の鼻の頭に浮んでいる笑いの小皺（こじわ）が消えてしまうほどの話をね。それは最近乃公が経験したばかりの実話なんだぜ）

或る日、一つの夢を見た。

乃公(おれ)は長い廊下を歩いていていた。不思議なことに、窓が一つもない廊下なんだ。天井も壁もすべて黄色でね、とても大変長いのだ、両側には、一定の間隔を置いて、同じような形をしたドーアが並んでいた。乃公はそのドーアのハンドルを一つ一つ、眼だけギロリと動かしながら検分してゆくのだ。そのハンドルは皆真鍮色をしているんだったたが、五つ目だったか六つ目だったかに、ただ一つピカピカ、金色をしたハンドルがあるの

だ、それは確か廊下の左側だったよ。

「金色のハンドル！」

燦然(さんぜん)たるハンドルの前までくると、乃公の手はひとりでにそのドーアの方へ伸びてゆくのだった。その黄金のハンドルを握って、グルリとまわして、向うへ押すのだった。無論いつだってそのドーアは向うへやすやすと明いたさ。乃公は吸いこまれるように、その室の中へ入ってゆくのだった。

その部屋は十坪ほどのがらんとした客間だった。真ん中に赤い絨毯(じゅうたん)が敷いてあってね、その上に水色の卓子(テーブル)と椅子とのワン・セットが載っているのだ。卓子

の上にはスペイン風のグリーンの花瓶が一つ、そして中にはきまって淡紅色のカーネーションが活(い)けてあった。

この部屋はたいへん風変りな作りだった。それが乃公の気に入っていたわけだが、奥の方の壁に大きな鏡が嵌(は)めこんであったのだ。それは髪床(かみどこ)の鏡よりももっと大きく、天井から床にまで達する大姿見で、幅も二間ほどあり、その欄間(らんま)には凝(こ)った重い織物で出来ている幅の狭いカーテンが左右に走っていた。カーテンの色は、生憎その鏡のある場所が小暗(こぐら)いためよくは判らなかったが、深い紫のように見えた。もちろんその鏡

の上には、こっちの部屋の調度などがそのまま反対に映っていた。乃公は部屋に入ると、第一番につかつかとその鏡の前まで進み、自分の顔をみるのが楽しみだった。鏡の位置が奥まって横向きになっていたため、鏡の前へ立たないと自分の顔は見えなかった。――乃公はそこでいつも勇ましい自分の顔を惚（ほ）れ惚（ぼ）れと見つめるのだった。ヴィクトル・エマヌエル第一世はこんな顔をしていたように思うなどと、私は反身（そりみ）になった。鏡の中の乃公の姿も、得意そうに、反身になったことである。

鏡の前で、さんざん睨（にら）めっこや、変な表情や滑稽な

身ぶりをして楽しんでいると、背後に突然人声がしたのだった。
「お飲みものは如何さまで……」
それは若い男の声だった。
ふりかえってみると、いつの間にか卓子（テーブル）の上に、銀の盆にのった洋酒の罎（びん）と盃とが並んでいた。そして入口のドーアを背にして、いま声を出したのであろう、立派な顔をしたスポーツマンらしい青年が立っている。いやそれだけではない、彼の青年とピッタリ寄りそって、一人の若い女が立っているのだった。彼等はいつの間に、どこから入ってきたのだろう。

その女は、はじめ下を向いていたが、やがてオズオズと顔をあげて、乃公の方を睨むように見たのであった。

（呀(あ)ッ）

乃公はいきなり胸をつかれたように思って、はっと眼を外(そ)らせた。ああ、その女は乃公の愛人だったのである。若い男となんか手をとりあって入ってきやがってと、乃公の心は穏かでなかった。

だが乃公は、ここで慌てるのは恥かしいと思った。飽(あ)くまで悠々(ゆうゆう)と落付きを見せて、卓子の方へ近づき、二人を背にして腰を下ろした。そして洋盃(コップ)の中に酒を

なみなみと注いで、そして静かに口のところへ持っていった。

ひそひそと、若い男女は乃公の背後で喃々私語(なんなんしご)しているではないか。その微(かす)かな声がアンプリファイヤーで増音せられて、乃公の鼓膜の近くで金盥(かなだらい)を叩きでもしているように響くのであった。

(あいつら、唯の仲じゃないぞ。もう行くところまで行っているに違いない!)

乃公はぐっとこみあげてくるものを、一生懸命に怺(こら)えた。でもむかむかとむかついてくる。乃公は目を瞑(と)じて、洋盃をとりあげるなり、ぐぐーっと一と息に嚥(の)

み干した。そして空になった洋盃を叩きつけるようにがちゃりと、卓上に置いたのである。——二人の私語ははたと熄んだ。

　乃公は慌てないで、じっと取り澄ましていた。（あいつら、なんのために、乃公に見せつけに来たのか？）乃公が気がつかないと思っているのだろうか。それならそれでいい。よおし、こっちもそのつもりで居てやろう。

　乃公は震える足を踏みしめて、椅子から立ち上った。そして二人の方を見ないようにして、静かに奥の、大鏡の方へ歩いていった。

乃公はいつの間にか、鏡の真際に寄って立っていた。鏡をとおして二人の男女の様子を見ると、彼等は身体と身体を抱きあわんばかりにして、もつれ合っていた。女の方が挑もうという姿勢をする。と、若い男の方が、僅かに逡巡（しゅんじゅん）の色を見せるという風だった。乃公の血は、足の方から頭へ向けて逆流した。

鏡を見ると、自分の顔は物凄（ものすご）いまでに表情がかわっていた。肩のあたりがわなわなと慄えているのが見えた。乃公が鏡の中から監視しているとも識らず、乃公の背後で不貞な奴等は醜行を演じかかっているのだ。乃公はすこし慌ててきた。声を出そうと思ったが咽喉

がからからに乾いて声が出てこない。気を落付けなくてはいけない——

乃公は煙草の力を借りようと思ったので、ポケットに手を入れて、そっとシガレット・ケースを引張りだした。そして蓋（ふた）をあけようと思ったが、どうしたのか明かない。乃公はそれを身体の蔭でやっているのである。顔を動かすこともいまは慎（つつし）まねばならないときだと思ったので、乃公は鏡に映っているその手を見た。そしてシガレット・ケースを見た。

（おや？）

乃公はちょっと吃驚（びっくり）した。わが手の中にあるのは、

シガレット・ケースではなかったから……。

（……ピストル！）

乃公の握りしめているのは、一挺のブローニングの四角なピストルだったではないか。乃公はふらふらと眩暈(めまい)を感じた。

すると、そのときだった。鏡の中の乃公はそのピストルを持つ手を静かに腹の方から胸へ上げてゆくのであった。そんな筈ではなかったのだが、乃公の意志に反してじりじりと上ってゆくのであった。奇怪なことにも、鏡の中の乃公の手は、乃公の本当の手よりも先にじりじり上へ上ってゆくのだった。ずいぶん気味の

わるい話であるが、鏡の中の自分の方が、お先へ運動を起してゆくのだった。乃公はじっとしているのがとても恐ろしくなった。鏡の前に立っている自分が、この儘じっとしているなら、乃公は発狂するかもしれない。鏡の中の自分が動いて、その前に立っている筈の自分が動かないということは、とりもなおさず、鏡の前に立っている乃公の本体が既に死んでしまっているのだという事実を証明することになるではないか。

（……）

切り裂くような大戦慄が全身を走った。乃公は慌てて、鏡の中にうつる乃公のあとを追って、ピストルを

持つ腕を胸の方にぐんぐんあげた。だから間もなく乃公は、鏡の中の乃公に追いついた。

（ああ、恐ろしかった！）

乃公は身体中びっしょり汗をかいた。

ピストルは、遂に胸の上いっぱいに持ち上がった。銃口がぴたりと左の肩にあたる。それから左の肩がじりじりと廻転してゆく。半眼を開いて、照準をじっと覘（ねら）う。狙いの定まったままに、なおもじりじりと左へ廻転してゆく。

「き、き、き、きっ……」

というような声をあげて、何も知らない二人は戯（たわむ）

れ合う。

「ち、畜生！」

憎い女だ、淫婦め！

ちらと鏡の中に、自分の顔を盗みみると、歯を剥きだして下唇をぐっと嚙みしめていた。口惜しさ一杯に張りきった表情が、必然的に次の行動へじりじり引込んでゆく。引金にかかっている二本の指がぐっと手前へ縮んで……

「どーン」

あ、やった。

「……う、ううーン」

電気に弾(はじ)かれたように、女はのけぞった。そして一方の手は乳の上あたりをおさえ、もう一方の腕は高く宙をつかんだかと思うと、どうとその場に倒れてしまった。

「人を殺した。とうとう乃公は、人殺しを実演してしまったのだ！」

乃公は、床の上に倒れている女の方へ近づいた。眠ったように女は動かない。見ると衣服の胸の上に、大きな赤い穴が明いて、そこから鮮血が滾々(こんこん)と吹きだして、はだけた胸許から頸部の方へちろちろと流れてゆくのであった。――男はいつの間にか、姿が見えな

い。ドーアから飛ぶようにして出ていったのであろう。
「ああ、乃公は人を殺してしまった……」
乃公は呟いた。しかし、そのとき、どっかでせせら笑うような乃公の声を聞いたように思った。
「うん、そうだった。いま、乃公は人殺しの夢を見ているんだ。……さあ、あんまり駭くと、惜しいところでこの夢が覚めてしまうぞ。本当に人殺しをしたように、がたがた慄えていなくちゃ駄目じゃないか。もっと怖がるんだ。もっともっと……」
——そうこうしているうちに、乃公はそれから先の記憶を失ってしまった。女を殺した場面は以上のとこ

ろまでしか覚えていない。

2

どうも夢の話だというのに、あまり詳しく話をしすぎたようで、さぞ退屈だったろうと思う。要は、乃公（おれ）のみた夢というのが、いかにはっきりとしたものであり、そして不思議な現象を持っているかということを理解して貰いたかったのであった。

乃公の夢は、以上の話だけで仕舞いではない。これからいよいよ、夢のミステリーについてお話したいと思うんだ。これから喋るところのものは、ぜひ聞いて貰いたいと思うのだよ。

さてそれから幾日経ってのことか忘れたがね、乃公はまたもう一つの夢を見たのだ。

——長い廊下をふらふらと歩いている……というところで気がついたのだ。

——相変らず長い廊下だ。天井も壁も黄色でね、……

「ああ、いつかこの廊下へ来たことがある！」乃公は

すぐ気がついた。それに気がつくと、いけないことに、途端にもう一つのことに気がついたのだった。

「……ああ、乃公は夢を見ているんだ、いま夢を見ているんだな」

と――。

――乃公は努めて、なるべくこの前のときと同じ歩きぶりで、その廊下を歩いていった。忠実に同じような歩きぶりを示さないと、折角の夢が破れるといけないと思ったから……。

やっぱりドーアを見ていった。左側の五つ目のところに、金色のハンドルがついているのを発見した。

「これだな」
乃公はにやりと笑った。
――その金色のハンドルを廻して、室内へ入りこんだ。もちろん部屋の中も、前回等に見たと全く同じことさ。室の中央に赤い絨毯（じゅうたん）が敷いてあるし、その上には瀟洒（しょうしゃ）な水色の卓子（テーブル）と椅子とのセットが載って居り、そのまた卓子の上には、緑色の花活が一つ、そして挿（さ）してある花まで同じ淡紅色のカーネーションだった。
「ふ、ふ、ふ。ふっ。」
乃公はおかしくなって笑い出したくなるのを、じっ

と怺えながら室の中央に進んだ。そこで奥の方を見ると、果して例の大鏡があったのではないか。乃公はすっかり安心して、たいへんに楽な気持になった。（役者などという職業も、毎日同じ道具立で、同じことを演るのだから、乃公がいま感じていると同じことに、初日以後は、やるたびに楽になってくるんだろう）

そんなことを思ったりした。

——乃公は例によって、いつの間にか大鏡の前に立っていた。そこに映る自分の姿をみると、例のとおり怒髪天をつき、髭は鼻の下をがっちりと固めているという勇ましい有様だった。

「どうぞお飲みものを……」

と、男の声がうしろでして、振りかえってみるとちゃんと例の立派な顔の若い男が立っていた。その傍には、下を俯（うつ）むいている連れの若い女さえも、前回とは寸分たがわぬ登場人物だった。

――それから乃公は、順序に随って、卓子のところへ帰って来た。そして洋酒の壜をあけて、盃へなみなみと注いだ。それをきっかけのようにして、背後で男女のひそひそと早口で語る声が聞えてきた。

――そこで乃公は、大いに憤慨した気持になって、洋盃の酒をぐっと一息にあおる。がちゃんと盃を卓子

の上に叩きつけるようにして立ち上るや、ふらふらと大鏡の方へ歩いてゆく……。

そこで乃公は、すこし薄気味が悪くなってきた、この前のひどく恐ろしかった印象が、まざまざと思いだされてきたからであった。あれから実にぞっとするようなことが起った。それは人殺しの場面を指して云うのではない。それよりもずっと前、この鏡の前に立って、自分の姿を映してみていると、自分の映った姿の方が、自分より先に動いているという。この眼にはっきりと映った異様なるあの有様……。

「あれだけは、実に恐ろしい」

乃公の身体は小きざみに震えてきた。おそるおそる一挙一動を鏡にうつして見るのだった。

——ポケットの中から、シガレット・ケースならぬピストルを取り出す……。

おお、それからだ！

——ピストルを握る手を、じりじりと胸の方へ上げてゆく。……じりじりと上げてゆく。

「はてな、……今日はよく合っているぞ」

乃公は期待した異常が今日は認められないのに、ほっと息を吐いた。しかしいつ急にありありと、二つの像が分裂をはじめないとも限らない……。

「ああ、大丈夫だ」

乃公は嬉しさと安心のあまり、声をあげようとしたほどだった。正しく異常はなかった。その途中わざと腕を上下へ動かしてみたが、実物と像とは、シンクロナイズしたトーキーのように、すこしも喰いちがいなく、同じ動作を同じ瞬間にくりかえしたのだった。

(この前のあの恐ろしい分離現象は、自分の心の迷いだったかしら！)

そんな風に思ったが、いやそんなに深く考えることはいらなかったのだ。なにしろ夢の中の出来ごとではないか。いろいろと理窟に合わないこともできる筈で

ある。原っぱの真中にいて、机がほしいと思えば、奇術のように、ぽっかりと机が飛びだしてくることも、夢の中だから、あったとて別に不思議はないのだ。

――銃口を左の肩にあてがい、狙いを定めて、静かに肩を左に廻してゆく。男と女とは、小声ながら、呼吸をはずませて云い争っている。若い女の、なんというか恨(うら)み死(じに)するような感能的な鼻声が聞えた。……

「そこだっ、――こん畜生！」

乃公はピストルの引金をひいた。

どーン。

「きゃーッ。……」

魂切る悲鳴が、部屋をひき裂かんばかりに起った。

——見れば女は、片手で肩のあたりを抑えどうと絨毯の上に倒れたが、もう一方の腕をしきりに動かして、手あたりしだい掻き捲（むし）っているのだった。

「どうしたんだろう？」

乃公は不審に思って、射殺した筈の女の方へ近づいた。女はまだ死にきってはいなかった。しかし見る見る気力が衰えてゆくのがはっきりと判った。肩先にあてていた真赤な血の染（そ）んだ手が徐々に下に滑り落ちてゆくと、傷口がぱくりと開いて、花が咲いたように鮮血がぱっとふきだした。ひたひたと女の四肢が震えた

かと思うと、やがてぐったりと身体を床に落として、

そして遂に動かなくなってしまった。

「いやに深刻な最後を演じたもんだ」

乃公はあざ笑いながら、近よって女の腰を蹴った。

女は睡っているように、動かなかった。それから乃公は頭の方へ廻って、女の顔を覗きこんだ。

「おや？」

例の昔識りあった愛人だとばかり思っていた乃公は、

女の横顔をみてはっとした。

「人違い……だっ」

乃公はハッと胸を衝かれたように感じたのだった。

駭（おどろ）いて女の首を抱きあげて、その死顔を向けてみた。

「呀（あ）ツ、これは……」

なんというひどい人違いをしたものだ。昔の愛人だとばかり思ったが、それが大違いで、その死体の女は、紛れもなく兄弟同様に親しくしている或る友人の妻君だったではないか！

「し、しまった！」

乃公は思わず歯を喰いしばった。どうしてこれに気がつかなかったことであろう。その妻君を射殺してしまうなんて、人殺しという罪も恐ろしいには違いないが、それよりもかの親しい友人に、なんといって謝っ

たらばいいだろうか。

その妻君は、実に感心な女なのだった。その連れあいというのが、乃公とは随分と親しい仲ではあったが、この頃だいぶん妙な噂を耳にするのであった。彼はなんでも、非常な高利で金を貸しつけて金を殖やしているそうだったし、たった一人、自宅で待っている妻君のところへもごく稀にしか帰って来なかった。妻君は心配のあまり、よく乃公のところへ来ては、いろいろ自分の到らないせいであろうからよくとりなしてくれるように、などといって、いつまでも畳の上にうっぷして泣いているという風だった。こんな人のよい、そ

して物やさしい女はないだろうと思った。それを一向知らないような顔付きで、うっちゃらかしておくその友人の気がしれなかった。

そんなわけだから、乃公はたいへんその妻君に同情して、機会あるたびに彼女を慰（なぐさ）めてきたのだ。そのたびに妻君は、乃公を訪ねてきたときよりはいくぶん朗かになって帰ってゆくのだった。しかしこのごろかの友人は、自分の妻君と乃公の間を妙に疑っているらしい。それは実に莫迦（ばか）げた腹立たしいことだけれど、二人きりで幾度となく、同じ屋根の下に居たということが、禍（わざわ）いの種となっているのだった。それは実に

困ったことだった。

「その問題の妻君を、乃公は手にかけて殺してしまったのだ。ああ、どうしよう」

友人に会わす顔がない。殺した妻君には、さらに相済まない。それとともに、この事件によって、友人の妻君と乃公との間の潔白は、どうしたって証明することが出来なくなったのである。乃公は妻君の死体の傍に俯伏（うつぶ）して、腸をかきむしられるような苦痛に責めさいなまれた……。

「……ああ、なんたる莫迦だろう。乃公はいま夢をみて泣いているぞ」

ふと、どこかで、自分が自分に云ってきかせる声が聞えた。なあんだ、ああこれは夢だったのだ。

入口ががたりと開いて、どやどやと一隊の人が雪崩（なだれ）こんだ。その先登には、妻君の横にいた美男子がいたが、乃公の顔をみると、ぎょっと尻込（しりご）みをして、大勢の後に隠れた。

「神妙（しんみょう）にしろ！」

警官の服を着ている一隊は、乃公に飛びかかって腕をねじあげた。乃公はいよいよこれから死刑になるのだなと思いながら、いと神妙に手錠をかけられたのであった。それから先は、さっぱり記憶がない。

以上の二つの夢を聞いて、君はどう思うか。なんと不思議な話ではないか。あまりにはっきりしすぎている夢だとは思わないか。

3

静かな冬の朝だった。

陽は高い塀に遮(さえぎ)られて見えないが、空はうららかに晴れ渡って、空気はシトロンのように爽(さわや)かであった。

真白の壁に囲まれた真四角の室の中で、友人の友枝八郎は、また私に例の夢の話のつづきをするのであった。

どうも乃公（おれ）は、ときどき頭が変になるので困るよ。年齢（とし）のせいでもあるまいのに、いろんなことを取り違えて困るのだよ。

このまえ君に、夢の中で同じような人殺しを二度くりかえしてやったことを話したと思うけれど、どこまで話したのかも、第一忘れてしまった。二度目の分は、たしか乃公が刑務所の未決に繋（つな）がれてから話したように思うが、たしかそうだったね。

それについてだが、乃公は滑稽な取違えをしていながら、それに気がつかないで、真面目くさって君に話をしたように覚えているがそうではなかったかね。実を云えばあの話をしているときには、君という人が夢でない方の現実の世界の人だとばかり思っていたのだ。しかしこうやって、例の殺人事件にかかわり、この刑務所の一室に相対しているところを見ると、君もまたあの夢の方の国に住んでいる人だということが判った。いままでどうしてそれに気がつかなかったろう。

乃公はどうも話が下手で弱るんだ。いいかね、もう一度云うとこうだ。君に例の夢の中の殺人事件につい

て話をした。ところが乃公は殺人罪で刑務所に入れられてしまったのだ。その刑務所へ君はしばしば訪ねてくれたではないか。すると殺人事件のあった世の中と君の住んでいる世の中とは、全く同じ世の中だったことが証明できるじゃないか。乃公は君に夢の国の殺人事件の話をした。しかも君は、乃公から云わせれば夢の国の人だったのだ。乃公にとっては、あの事件は夢の中の出来ごとだけれど、君にとっては、君が住んでいる世の中の出来ごとだったんだ。しかし、乃公はいま、夢の国の中で話をしているのだよ。……そんなことを先から先へ考えてゆくと、頭の悪い乃公には、い

つも何方が何方だかわからなくなるのだ。あとは誰かの判断に委(まか)せて置くことにして、――さて、あれから先のことを話そう。

或るとき乃公は、さっきも云ったように、刑務所の未決に繋がれている自分自身を見出したのだ。その原因が例の大鏡のある部屋の殺人事件に関係していると知って、乃公は、

「まあ、何という長ったらしい夢を見ることだろう?」

と呆(あき)れてしまった。

後で聞いた話だけれど、そのとき乃公は、もう少しで精神病院へ強制的に抛(ほう)りこまれるところであったそ

うだ。いいところで気がついてよかったよ。

ところでその後だんだん調べられたが、その係官の中に杉浦予審判事というたいへん親切そうな仁がいてね、その仁が乃公の聞きもしないことを、べらべら話をしてくれたよ。それは実に素晴らしい想像力から生れでた物語なのだ。まるで一篇のショート・ストーリーのように怪奇を極めた謎々ばなしなのさ。彼の物語の真偽はとるに足りないけれど、いかにもそのこじつけが面白いから、是非話して聞かせよう。

「お前はその二つの夢を、本当の夢だと思っているか。そして、よしんばそれが夢だとしても、その二つの夢

の間に、或る不審が存在するということに気がつかないのか」

　と、かの杉浦予審判事は、改まった口調で言いだしたのさ。乃公は面倒くさいから、黙っていた。すると彼は得々（とくとく）として喋りだしたものである。云うところはこうだ。

「お前は、はじめの夢で、かつての愛人を射殺し、二度目の夢では友人の妻君を殺したという。もしお前の云うとおり夢は同じことを二度以上見るというならば、その被害者が両度とも同じである筈ではないか。それが違っているのは不思議だとは思わないか」

というのだ。乃公は反対した。夢は自由である。登場人物など自由奔放に変り得るものだと言ってやった。

すると彼はまた訊ねるのだった。

「お前が最初の愛人を殺したときの光景はたいへん夢幻的に美しく、かつまた単純なものだった。しかるに二度目に友人の妻君を殺したときの光景は、あまりに現実的色彩が強すぎるではないか。この点の相違を考えるとき、なにかそこに或る作為(さくい)が盛られているとは気付かないのか」

と、ひどく真面目な顔をして云うのだった。乃公はこれを聞いた直後、こいつはいいことを云うと思った。

たしかに乃公は二度目の夢の中での殺人に、かなり真実に迫るものを感じたから。だが、すこし長く考えていると、判事は些細（ささい）なことを、ひどくこじつけて論じてやがるぞと思って軽蔑を感じた。

「お前は黙っとるが、少しは僕の云うことが判るらしいね」とひとりぎめをして杉浦氏はまた語（ことば）をついだ。

「いいかね、まだまだ不審なことを並べてみるよ。第一、あの部屋を何と思う。実に変な部屋ではないか。奥に入ると、髪床にあるような大きな鏡が壁を蔽（おお）っていたり、変に印象的な赤い絨毯があったり、それから椅子セットの単純な色合といい、配置といい、また花

についてでもそれを云うことが出来る。一体人の住む部屋ならば、もっとこまごましたものがあるべきだが、それが見当らないし、なにしろ単純で印象的で、一度見ると、二度と忘れないようにできている。魔術師が特に設計したようなもので、部屋の形はしているが全然人間の住むに適せず、トリックのための部屋としか思われないではないか」

という。——なあに、夢の中のことだ、単純で印象的なのは当り前だと云ってやりたかったよ、乃公は。

「どうだ、いちいちお前の胸に思いあたることばかりだろう」と予審判事はいよいよ得意であった。

「それからまだあとに、実に大きな矛盾が残っているのだよ。お前がはじめに見た夢の中で、たいへん恐怖を感じた場面のあったのを覚えているだろう。実は、あのことだ。お前はピストルを手にして、鏡の中の自分の姿を見た。すると奇怪なことに、その自分の姿は、ピストルを握った手を左の胸のところまであげていた。それだのにお前自身の本当の手は、ポケットからピストルを出して握ったまま、ぼんやりとしていた。つまり自分の本当の身体と、鏡の中の映像との動作に喰いちがいのあるのを発見した。お前はそこですっかり脅えてしまった。一つの霊魂を宿している筈の実体と映

像との両空間に不思議な断層を発見したために、ただ訳もなく狼狽してしまったのだ。もしお前が、常人のように気をしっかり持っていたのだったら、その空間の喰い違いに、はっとして本当のことを気付かねばならない筈だった。ここが大事なところだ。常人なら、どう思うだろう。（これは可笑しいぞ。お化け鏡ではあるまいし、鏡に映った自分の姿が、自分の演りもしない動作をしているなんて可笑しいじゃないか。鏡の中に映っているのは自分の姿ではないのだ！）と気がつかなければならん。つまりその大鏡は鏡にあらずして、実はその硝子板の向うに、自分と同じ扮装をして

いる別人が向い合って立っていて、いかにも自分の姿が鏡に映っているように思わせているのだった。そういうことが、直ぐに判らなければならなかったのだ、常人ならばねえ」

この話を聞いたときばかりは、流石（さすが）の乃公も、金槌（かなづち）で頭を殴られたようにはっと驚いたよ。――だが、そんな莫迦気（ばかげ）たことがあるものかと、憤慨した。だって室内の調度がちゃんと映っているのですよ。椅子も、卓子（テーブル）も、それから卓子の上の洋酒の盆も。いやまだある。そこに並んでいる男と女の姿もちゃんと映っていましたよ、そんな莫迦気たことがあるものですか、と

反対した。
「それだから、先刻から云っているのだ。トリックの道具立がちゃんとその部屋に出来ていたのだ。鏡に映っていると思ったのは、実は大きな硝子板の向うに、もう一つ同じ形に作った部屋が見えていたのだ。同じ配列で、裏向きにしておけばよかったのだ。人間だってそうだ。こっちと向うとに二人ずつの男女が居て、鏡にうつっているように見せかけたのだよ。いや向うの部屋には、もう一人男がいた。そいつは先にも云ったが、お前と同じ扮装をしていたのだ。何しろお前は気がおかしかったから、別人の男女をさえ、同じ顔を

しているように感ちがいしたのだ。そんな場合には、常人を欺（あざむ）くことさえ容易だろう。さあそこで考えなければならんのは、なぜ二重の部屋を作り、こっちと向うの空間とを同一の空間と思わせたのだろう。その答は至極簡単明瞭である。お前の偽の姿をした男が、お前にその後の動作を暗示したのだ。つまりお前にピストルで狙わせ、そしてうしろにいる女を射撃させたのだ。ドーンと放ったのは、恐らく空砲だったろう、女はかねて手筈（てはず）を決めてあったとおりに、その場にぶったおれる。そして芝居もどきに、卵の殻かなんかにつめてあった紅がらを流して、ピストルに射たれて

死んだ様子を想わせたのだ」

——ああ、それでは、なぜ彼は私に、そんなことをさせたんだろう、と乃公は思わず叫んでしまった。

「それは判っている。それは第二の夢の場面にお前をひっぱり出し、そして友人の妻君というのを本当に殺させたかったのだ。精神薄弱者たるお前に、再度おなじ夢を見たと思わせ、前回のとおりの射撃をやらせたのだ。そのときお前がとりだしたピストルはちゃんと実弾が入っていたのだよ。そして二度目の夢の場面には、例の硝子板の向うの部屋は使わなかった。それは向うの部屋を暗室にすることによって、硝子板を鏡と

同じ作用をさせたのだ。そんなトリックはよく、博覧会などの見世物で、やってみせるトリックで、誰でも知っている。お前は心にもなく、一人の女を殺してしまったのだ」

——なぜ私は、その女を殺さねばならなかったのですか、と乃公は怒鳴るようにして聞きかえしたものだ。

すると、

「それは調べて判った。その女を殺すべく企(たくら)んだのは、その亭主である。つまりお前の親友という男だ。その部屋もなにもかも、お前の友人が作ったのだ」

——いいえ、それは違います。あの男は、そんな悪い

人間ではありません、といってやった。
「いや、もうすっかり種はあがっているのだ。お前が弁解してやっても効果がない。お前の友人という男は憎むべき奴だ。彼は事業に失敗して大金が入用だったのだ。その妻君には莫大な保険が懸けてあった。自分の手で殺したのでは駄目だから、お前を利用して殺させようとしたのだ。妻君をあの部屋に誘いだすことも、いい加減な口実をつかってやったことらしい。妻君は案内されてあの部屋に入り、発狂しているとでもいいふらしてあったお前の姿を見させせたものらしい。そしてお前に射殺されてしまったのだ。——とにかくお前

がここへ来て急に頭の調子が直ってくれてよかった
よ」
　乃公は聞いているうちに、あまりに巧みな話の筋に、もうちょっとでひっかかるところであった。そんな手数のかかることがあってたまるものか。判事さんの邪推だと思ったのだ。
　――おかしいですよ予審判事さん。どうして彼は私をうまく使いこなしたのです。
「そりゃ判っているじゃないか。お前は夢というものをどう考えているか、などということについて、いつもその友人にくどくどと話をして聞かせる病があった

というじゃないか。それですっかり利用されちまったのだ」

というのだよ、君。乃公は憐れむよ、予審判事さんの苦労性をね。君は乃公のことを利用して、自分は手を下さずして君の妻君を殺させたといっているのだからね。随分失礼な人じゃないか。これがまあ幸いにも、夢の中での出来ごとなのだから忍べるが、本当の世の空間に起ったことだったら、そいつは助からない話じゃないか。

しかし予審判事さんは、あくまで執拗なんだ、困ったね。

「お前は夢の中の話だというが、それは間違いだよ。それでも夢だと思っているのだったら、その思い違いであることを証明してやろう……」

と云うのさ。——じゃ、どうするんです！　と聞いてやったら、乃公のことを鏡の前へ連れていってね、

「どうだ、この鏡にうつっているお前の顔は、お前の夢の中の顔か、それとも現実の世におけるお前の顔か」

と訊ねるじゃないか。見ると、乃公の顔は青白くて、弱々しくまず丸顔だ。夢で見るあの勇ましい顔とは全然違っている。

「これは現実の顔ですよ」

と乃公は答えちまった。すると予審判事は、それ見ろというような顔をして云った。

「それは可笑しいじゃないか。お前はいま夢の中に居るのだと先刻から云っているじゃないか。それが現実の顔だとは、こいつは可笑しい。そうだろう。いいかい、よく考えて、よく覚えていなくちゃ駄目だよ。お前が有ると信じている夢の国なんて、始めからありはしないのだ。空間は常に一つだ。だのにお前は空間が二つもあって、別な顔をしているようにいうが、畢竟（ひっきょう）同一の顔なのだ。いいかね。お前の精神状態がひどくなると、すっかり人間が違ってしまう。そして頭の手

入れもしないし、髭も生え放題に放って置くのだ。お前は半裸体で、むやみと野外を駆けまわり、しまいには山の中へ隠れてしまうことさえあるのだ。そこでお前は陽にやけて、すっかり顔や形が違ってしまう。ではいま、お前の見ている前で顔にすこし手を入れてみよう。まず櫛（くし）のよく入っている頭髪を、このようにぐしゃぐしゃに掻き乱して、毛をおっ立ててしまう。それから、ここにある長いつけ髭をこういう具合につけてみる。そして顔に、この褐色の白粉を塗る。……さあよく鏡を見てごらん、その顔はどうだ。お前がもう一つの世の空間で持っていると信じていた顔に成った

だろう、はっはっはっ」

——乃公は呀ッと駭(おどろ)いてしまった。正しくそのとおりだ。……しかし待てよ、やっぱり変だ。予審判事さんの手際はたいへん美事なようで、実はそうでない。彼は数学を知らないも同然だ。彼のロジックはちっとも合っていないのである。すなわち彼は、夢の中の髭茫々(ひげぼうぼう)の乃公の顔にすっかり手を入れて置いて、いかにも現実の世の乃公の顔のように化粧して置き、それを黙っていたのだ。そして今、再び逆に、もとの夢の中の顔に仮装法を以て還元してみせたのだ。それでは予審判事さんの云っているような一方的の証明にはな

らない。やっぱり乃公はいま夢の中に居るんだ。
――と危いところで欺されようとして助かったよ。ねえ君、お互はやっぱり、いま夢の世の中に居るんだよ。……

そのとき入口の鉄扉がぎいーっと開いた。そして私の予期したとおり手錠をもった看守長に続いて、痩軀（そうく）鶴のような典獄さんと、それから大きな山芋に金襴の衣を被せたような教誨師とが静々と入って来た。
「ああ、話の途中でしょうが……」と看守長が声をかけた。「もう刑の執行の時刻になりましたので、友枝

さんは御退室をねがいたい」

友人はぎくりとして、椅子から立った。そして一行の方を睨(にら)みつけながら、私の背中を抱えるようにして云った。

「君、恐れちゃいけないよ。誰がなんといっても、いまお互の立っている空間は夢の中なんだ。これから君は絞首台に登るのだろうけれど。それで生命を本当に失うんだなんて誤解してはいけないよ。結局、夢の中で死刑になるところを見ているわけなんだからね。恐れることなんか、少しもありはしない。……では、あまり気もちがわるかったら、早く夢から覚めたまえ。

君は間もなく温かいベッドの上で眼を覚ますことだろう。隣りの部屋では、君の子供さんたちが、もう受信機のスイッチをひねってラジオ体操の音楽を鳴らしているのが聞えてくるだろうよ。あまり恐ろしい夢のことなんか、ベッドの上で考え続けていないように。早く飛び起きて、会社への出勤に遅れないようにしたまえ。では、乃公は失敬するよ……」といって友人は私の監房を出ていった。

そうだ、そうだ。私はやっぱり夢を見ているのだ。死刑台なんか……なんでもないぞ!

底本：「海野十三全集　第４巻　十八時の音楽浴」三一書房
　　１９８９（平成元）年７月15日第１版第１刷発行
初出：「ぷろふいる」
　　１９３５（昭和10）年４月
入力：tatsuki
校正：まや
２００５年３月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。